



師走

師走(しわす)とは陰暦12月の異称であることはよく知られています。

ただし語源については12月になると、家々で師(僧)を迎えて読経などの仏事を行うため、師が忙しく走り回ることから「師馳(しは)せ月」といったのを誤ったものだという説をはじめいくつかあるといえます。

明治初頭より陽暦(新暦)を採用した日本では、12か月を1月～12月の数字で表しています。しかし、それ以前は、季節感がわかるような和風月名で各月を表現しており、その最後の月を「師走」と呼んでいました。現在の日本では、これを陽暦(新暦)の12月に当てはめ「師走=12月の和風月名」として用いています。

陰暦の12月は、陽暦の12月と時期が違います。陽暦は陰暦から1か月ほど遅れています。

陰暦の12月は、陽暦の12月下旬から翌年2月上旬頃に当たるのです。

師走は「しわす、しはす」と読み、その意味・由来・語源には諸説あります。

もっとも有名な説は、師匠である僧侶が、お経をあげるために東西を馳せる月という意味の「師馳す(しはす)」だということです。

この「師馳す」は、平安末期の「色葉字類抄(いろはじるいしょう)」の説明によると民間語源とされ、現代の「師走」は、この説をもとに字が当てられたと考えられています。

ほかに、年が果てる(終わる)という意味の「年果つ(としはつ)」が「しはす」に変化したという説もあり、万葉集のころから「シハス」と呼ばれていたとの説もあります。

四季の果てる月を意味する「四極(しはつ)」を語源とする説、

一年の最後になし終えるという意味の「為果つ(しはつ)」を語源とする説などもあります。

陰暦でも陽暦でも、一年の最後の日は「大晦日(おおみそか)」「大晦(おおつごもり)」といえます。

晦日(みそか)が、毎月末日を指すため、年の最後の末日に「大」を付けて大晦日になったというわけです。

一方の「晦(つごもり)」とは、月が隠れる「月隠(つきごもり)」が変化したものであり、こちらも毎月末日となる新月を意味します。陰暦では新月から満月、満月から新月までを1か月としたため、毎月末日には新月で月が見えなかった、隠れたように感じたということでしょう。こうした部分にも、陰暦が月や自然に密着した暦であるとわかりますね。



【お知らせ】冬期閉園時間について

早めの日没の為、12月・1月は
午後4時を閉園時間とさせていただきます。

